英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究 (III) —カタカナ語と非カタカナ語の使い分けと日本語レベルの関係— *

池谷 知子 † · 久津木 文 ‡
神戸松蔭女子学院大学 文学部 † · 人間科学部 ‡
tikeya[at]shoin.ac.jp† · ayakutsuki[at]shoin.ac.jp‡

Study of KATAKANA for English Speakers Learning Japanese (III)

IKEYA Tomoko† · KUTSUKI Aya‡
Faculty of Letters† · Faculty of Human Sciences‡, Kobe Shoin Women's University

Abstract

日本語を学ぶ外国人が苦労するものとして「日本語の中のカタカナ」が挙げられる。本研究は英語母語話者の日本語学習者 55 人に次の 6 組のカタカナ語と非カタカナ語の使い分けの研究を行った。これらの 6 組を理解しやすいと予測されるもの順に分類し、日本語のレベル（初級か上級か）がカタカナ語の使用にどのように影響しているかを確認した結果、以下のようなことが明らかになった。

＜タイプ I：理解しやすいタイプ＞
＝カタカナ語と非カタカナ語の指示対象が別になっており、カタカナ語が有標なもの

カテゴリー 3　Glove　グローブと手袋
カテゴリー 4　Potato　ポテトと芋

＜タイプ II：使い分けの基準がわかれば理解しやすいタイプ＞
＝材質や形態、使用方法などで使い分けがされているもの

---

* この論文は日本私立学校振興共済事業団から平成 24 年度・25 年度・26 年度学術研究振興資金援助を受けた「日本語学習者におけるカタカナ外来語の理解についての研究」（研究代表者：久津木文）の調査結果の一部である。この調査では日本語母語話者と英語母語話者について同じような調査を行った。日本語母語話者については久津木が分析し、英語母語話者については池谷が分析した。

カテゴリー 1 Bottle ボトルと瓶
カテゴリー 2 Brush ブラシと筆

＜タイプ III：理解しにくいタイプ＞
＝一見、非常に意味がよく似ていて使い分けの基準を規則化しにくいもの
カテゴリー 5 Tea ティーとお茶
カテゴリー 6 Ticket チケットと券

Japanese learners as a second language find KATAKANA words difficult, as it is hard to distinguish them from English words, and there are also Non-KATAKANA synonyms in Japanese.

This study looks into 55 Japanese learners of the English mother tongue speaker for their distinction of 6 pairs of KATAKANA word and Non-KATAKANA word. The following results were obtained: these words were classified into three types by easiness to understand.

< Type I: Easy to understand as KATANAKA words and Non-KATAKANA words in pairs have their own denotations respectively. >

Category 3 Glove: "GUROBE"/"TEBUKURO"
Category 4 Potato: "POTETO"/"IMO"

< Type II: Need to realize standards of the usage. Correct words must be chosen by materials, forms and situations. >

Category 1 Bottle: "BOTORU"/"BIN"
Category 2 Brush: "BURASHI"/"FUDE"

< Type III: Difficult to discern as KATANAKA words and Non-KATAKANA words in pairs indicate almost the same thing. >

Category 5 Tea: "THI"/"OCHA"
Category 6 Ticket: "THIKETTO"/"KEN"

キーワード**:** 英語母語話者の日本語学習者, 意味のずれ, カタカナ語, 非カタカナ語, 習得

Key Words: English Speakers Learning Japanese, Gap of the meaning, Katakana, Non-Katakana, Learning

1. 研究の背景と目的

鳥飼（2007）などでも指摘されているように、日本語を学ぶ外国人が苦労するものとして「日本語の中のカタカナ」が挙げられる。日本語の語彙の中には多くのカタカナ語が入っているが、それが原義の意味とイコールではないからである。その中の有名な例として、「マンション」が知られている。

> マンション…中高層の集合住宅　1960 年代から急速に普及（広辞苑　第五版より）
>
> Mansion……（豪華な）大邸宅、屋敷（ジーニアス英和辞典　第四版より）

また、カタカナ語と原義の意味のずれだけではなく、同じようなカタカナ語の対象物をカタカナ語で呼んだり、非カタカナ語で呼んだりすることもある。その例として、「鮭

(サケ)」と「サーモン」をあげる。インターネットの寿司屋の紹介ページから「鮭＝サーモン」のように書かれているところを引用してみる。

> 【お寿司屋さんの歩き方　鮭】(http://www.sushiwalking.com/sake/)
>
> 寿司ネタにされるときはサーモンと呼ばれることも多いサケ。(下線部は筆者)
> 脂のノリといい、身のうまさといいまさに絶品です。特に秋口に産卵を控えたサケの美味しさはぜひ味わってみていただきたい一品です。サケの脂としょう油が奏でるハーモニーをお試しください。

ここでは寿司ネタにされると、鮭はサーモンと呼ばれることが指摘されている。これを裏付けるように、刺身の詰め合わせの鮭にはサーモンというラベルが貼ってあることがよくある。

広辞苑で鮭とサーモンを引いてみると次のように述べられている。

> さけ【鮭】…広義にはサケ目サケ科のサケ・ベニザケ・ギンザケ・マスの一部などの総称。
> サーモン【salmon】…鮭（さけ）
>
> （広辞苑　第五版より）

辞書的な記述では「サーモン＝鮭」であるが、実際にスーパーに行くと同じ魚が「鮭」と呼ばれていたり、「サーモン」と呼ばれていたりする。色々な鮭とサーモンを集めてみた。

ここで問題となってくるのが、1つの事物を表す時にカタカナ語の「サーモン」を使ったり、非カタカナ語の「鮭」を使ったりした場合の意味のマッピング（使い分け）である。鳥飼（2007）などでも指摘されているように、日本語を学ぶ外国人が苦労するものとして「日本語の中のカタカナ」が挙げられている。

カタカナ語を説明することは一見、語彙の問題であり単純に見えるが、スーパーで同じ魚が「サーモン」「鮭」という二つの名前で売られているのに対して感じる日本語学習者の素朴な疑問、つまり、いつ「サーモン」と呼び、いつ「鮭」を使うのか、ということに対して明確に答えられる日本人は少ないだろう。なぜならカタカナ語と非カタカナ語の使い分けは辞書には載っていない問題だからである。また、このことは英語の salmon≠サーモン、鮭ということも示している。

日本語は、固有語と外来語と２つの語種に分類され、かつ、外来語の中には漢語と、カタカナ語に分類することが一般的である。つまり、漢語も中国からの借用語であるが、ここでは議論を簡単にするため、いわゆる、カタカナで表記される狭義の外来語のみをカタカナ語と呼ぶことにする。また、原義とのズレを確認するために、英語を母語とする日本語学習者のみに調査を行ったので、カタカナで表記される外来語の中でも、さらに英語を原義とする単語のみを調査の対象とする。

一方で、非カタカナ語としては、単なる「和語」だけではなく、「和語」と「漢語」との両方を含む広義のものを非カタカナ語と呼ぶことにする。

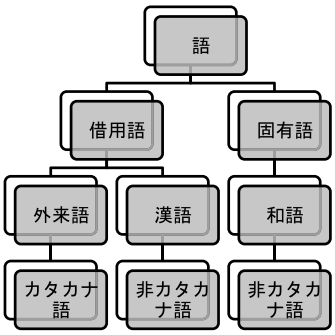
＜本発表におけるカタカナ語の定義＞

主に英語を母語とする日本語学習者を研究対象とするため、取り扱うカタカナ語も英語起源のカタカナ語のみとする。よって、本発表でのカタカナ語とは「(英語に由来し、カタカナで表記される）外来語」と定義する。

秋元（2002: p.64）の表を元に、「カタカナ語」と「非カタカナ語」を入れ、再構成したものが表 1 である。

この研究は、日本私立学校振興共済事業団から平成 24 年度〜平成 26 年度に学術研究振興資金援助を受け、「日本語学習者におけるカタカナ外来語の理解についての研究」（研究代表者：久津木文）として行った研究成果の一部をまとめたものである。この調査で

表 1: カタカナ語と非カタカナ語の位置関係



は、英語母語話者の日本語学習者を調査し、カタカナ語と非カタカナ語の意味のマッピングをどのようにおこなっているのかを調査した。

これらの調査の詳しい報告については、池谷・久津木 (2013)、久津木・池谷（2013）、池谷・久津木 (2014) に譲るとするが、これからの議論のために、まず、池谷・久津木 (2014) の結果を簡単に概観し、さらに新しい知見を述べていく。

2.　池谷・久津木（2014）の調査概要

2.1　調査の目的

池谷・久津木 (2014) の調査の目的は、英語を母語とする日本語学習者がカタカナ語と非カタカナ語をどのように使い分けているのかを調査することであった。同時に英語の意味カテゴリーがどのようにカタカナ語の意味に干渉しているのかを調査した。つまり、カタカナ語と非カタカナ語の意味のマッピングの傾向をあきらかにすることが第一の目的である。前回の調査の方法と概要を簡単にまとめてみる。

2.2　調査の概要

英語を母語とする日本語学習者 55 名に対して、6 つのカテゴリーから成るカタカナ語と非カタカナ語の使い分けを調査する。1 つのカテゴリーは、そのカテゴリーに属するとされる 5 枚の写真で構成される。それを見て、その対象物を「カタカナ語」で言うのか、「非カタカナ語」で言うかを確認する。つまり、1 枚の写真がカタカナ語と非カタカナ語で 2 回使われる。

まとめると、1 つのカテゴリーは、カタカナ語（写真刺激 5 枚）＋非カタカナ語（写真刺激 5 枚）＝計 10 質問 で構成される。それを 6 つのカテゴリーで調査を行う。つまり、被験者は、60 質問（1 カテゴリー 10 質問 ×6 カテゴリー）に答えることになる。調査したカテゴリーは以下のようになっている。

カテゴリー１	Bottle	ボトルと瓶
カテゴリー２	Brush	ブラシと筆
カテゴリー３	Glove	グローブと手袋
カテゴリー４	Potato	ポテトとじゃが芋
カテゴリー５	Tea	ティーとお茶
カテゴリー６	Ticket	チケットと券

被験者は写真刺激を見て、それをカタカナ語で呼ぶか、非カタカナ語で呼ぶかを、直感に従いリッカート法による４段階の確信度で回答する。非カタカナ語の単語を尋ねる時に、それを英語のオリジナルの単語でも呼ぶことをできるのかも確認した。

回答の選択肢は以下のようになっている。

1 Never （まったく＊＊を使わない）
2 Sometimes (どちらかというと＊＊を使わない)
3 Often （どちらかと言うと＊＊を使う）
4 Always （常に＊＊を使う）

つまり、「Never」や「Sometimes」が多いと、その単語を「使わない」という否定的な傾向になり、「Always」や「Often」が多いと、その単語を「使う」という肯定的な傾向になる。

カテゴリー１のカタカナ語の「ボトル」と、非カタカナ語の「瓶」をどのように使い分けているかをみる設問を例にとって、説明していく。

日本語における「ボトル」と「瓶」の使い分けについて簡単にまとめておく。「ワインボトル」は「ワインの瓶」のように「ボトル」と「瓶」の両方の使用を許容するが、同じガラス製品でも「ビール瓶」は、「＊ビールボトル」が許容されない。「ボトルビール」という言い方もあるが、それは中身の入った瓶ビールのことを指し、空き瓶のことを示さないため、「ボトル」が許容されないと考える。また、同じ飲み物を入れるものであってもプラスチック製である「ペットボトル」は「ボトル」のみ許容され、「瓶」は許容されない。

つまり、「瓶」はガラス製のものに使用し、プラスチック製のものは「ボトル」と呼ばれることから、その材料が使い分けの基準となっていることが推測される。しかし、問題なの「瓶」の中にも「ボトル」と呼べるものと「ボトル」と呼べないものが混在していることである。カテゴリー１の「ボトル」と「瓶」で使われた写真刺激を解説すると次のようになっている。

＜カテゴリー１の「ボトル」と「瓶」で使われた写真刺激＞

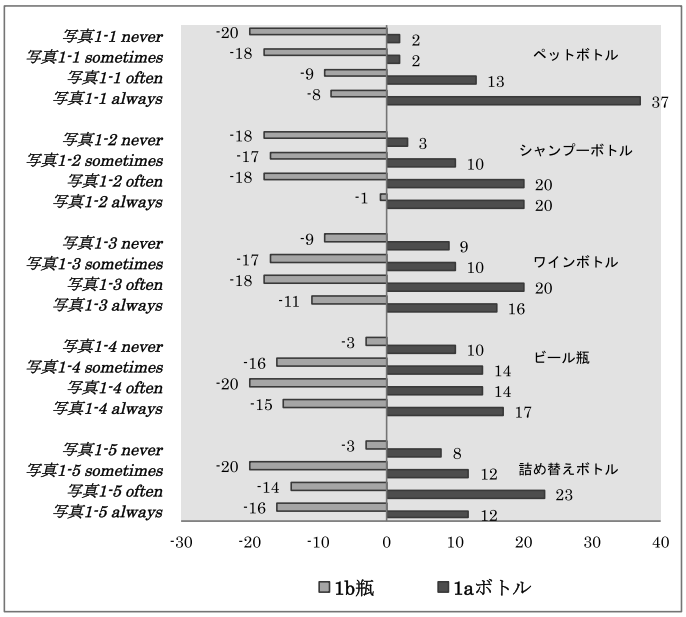
1-1「水やジュースなどの飲み物を入れるプラスチック製のもの（ペットボトル）」

1-2「シャンプーを入れるプラスチック製のもの（シャンプーボトル）」

1-3「ワインを入れるガラス製のもの（ワインボトル）」
1-4「ビールを入れるガラス製のもの（ビール瓶）」
1-5「取っ手がついた洗濯洗剤や柔軟剤をいれるプラスチック製のもの（詰め替えボトル）」

これを見るとボトルと呼ばれているものはほとんどプラスチック製であり、「＊ペット瓶」のようにそれを「瓶」と呼ぶことができない。しかし、1-3 の「ワインを入れるガラス製のもの」に関しては「ワインボトル」と言うことができる。英語を母語とする日本語学習者 55 名のカテゴリー 1 の「ボトル」と「瓶」の使い分けについては、以下のような結果となった。

表 2: カテゴリー 1　Bottle「ボトル」と「瓶」の使い分け



数値を対照させるためにカタカナ語「1 a ボトル」を右側に配置し、非カタカナ語「1b 瓶」を負の値として左側に配置して、それぞれを対照させたグラフにした。そのため、「1b 瓶」の値がマイナスになっているが、実際にはプラスである。

1 つの写真 1-1 に対して、そこで得られた 4 つの回答を左端から「1　Never（まったく＊＊を使わない）」「2　Sometimes(どちらかというと＊＊を使わない)」「3　Often（どちらかと言うと＊＊を使う）」「4　Always（常に＊＊を使う）」の順に並べてある。それが写真 1-1 から 1-5 まで並んでいる。

カテゴリー 1 a「ボトル」について、1-1「ペットボトル」を常にカタカナ語の「ボトル」が使うという回答者は 67%(37 人) おり、群を抜いて高かった。しかし、一方で 1-3「ワインボトル 29%（16 人）」1-4「ビール瓶 30%（17 人）」で「ボトル」を使うという回

答者には差が無い。

カテゴリー 1b「瓶」について、常に「瓶」を使うという回答者は、1-3「ワインボトル 20%（11 人）」と 1-4「ビール瓶 29%(16 人)」の間であまり差がない。これらのことから、「ワインボトル」と「ビール瓶」の使い分けは強く認識されていないことがわかる。

日本語学習者のボトルと瓶の使い分けに関して、日本語学習者はペットボトルのみ、高い確信をもって「ボトル」と判断しているが、「瓶」に関しては、使い分けの基準になるものが、素材（ガラス or プラスチック）なのか、内容物（飲めるもの or 飲めないも）なのか、形状（筒型 or 持ち手付き）なのか等、はっきりしていないと言える。これはおそらく、ペットボトルは「ペットボトル」という名称をよく聞くため、「ボトル」であるとはっきり認識しているが、洗剤やシャンプーの容器のようにあまり名称をとりあげられることがないものは、「ボトル」なのか「瓶」なのか判断がつかないことが推測される。また、瓶についても素材がガラス製であるということで「瓶」の認知的カテゴリーを形成するまでにはいたっていないので、ガラス製の 1-3「ワインボトル」や 1-4「ビール瓶」の写真刺激でも、３や４の確信度をもって「瓶」使うと答えた人は半分に満たない数になっている。

池谷・久津木（2014）では、６つのカテゴリーすべてのものについて、英語を母語とする学習者がカタカナ語と非カタカナ語をどのように認識しているかを調査した結果を明らかにした。その結果、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けに以下のような 5 つの傾向が見られた。

結果

① カタカナ語に関して、非カタカナ語に対応する語がなく「ペットボトル」「歯ブラシ」のように指示対象物の名称の中にそのカタカナ語が入っていれば、積極的にカタカナ語を選びやすい。

② 「筆」と「ブラシ」の使い分けや「お茶」と「ティー」の使い分けから、日本的なものは非カタカナ語、そうではないものはカタカナ語を選ぶ傾向がある。

③ 対象物を表す時、カタカナ語と非カタカナ語のどちらを使えばよいのか不明な場合、英語の母語の知識を生かして、それと対応するカタカナ語が選択されやすい。

④ 「革手袋」を「グローブ」と判断することから、材料や形態など、独自の使い分けの基準を適用して判断することがある。その時の判断に母語干渉が現れるなど、一種、中間言語的な振る舞いを見せる。

⑤ 一般的に、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けは辞書に書いていないことが多いことから、学習者は多くの例から帰納的にその意味カテゴリーを形成していく。そのため、その情報にどのくらいアクセスできるかが習得の鍵になっている可能性がある。

表 3: 被験者属性のまとめ（2013 年 7 月〜9 月にデータ採取）

1	性別	男性 18 名　女性 37 名　合計 55 名
2	年齢	10 代 13 名、20 代 39 名、30 代 4 名　平均→ 21.6 歳
3	母語	英語
4	英語以外の使用言語	日本語 1 名　中国語 6 名　韓国語 2 名　その他 4 名
5	日本語レベル	初級 12 名　中級 32 名　上級 9 名
6	日本語学習時間	0.5 年〜10 年　平均→ 3.95 年

これらの結果を踏まえて、カタカナ語と非カタカナ語の両方が存在する場合、どのような使い分けが理解しやすく、どのような使い分けが理解しにくいのかを探ることにした。

3.　被験者

この調査の対象者は英語を母語話とする者で、2013 年の 7 月〜9 月にかけてH県内の複数の日本語短期プログラムの学生を対象として行った。

被験者の内訳は男性が 18 人、女性が 37 人でN=55 である。対象の年齢は 10 代が 13 人、20 代が 39 人、30 代以上が 4 人で、平均年年齢は 21.6 歳であった。日本語のレベルは自己申告であるが初級が 12 人、中級が 32 人、上級が 9 人であった。アンケートには公的な日本語のテストを受けたことがある場合は記入してもらったが、OPI や JLPT など様々であった。また、夏の日本語短期プログラムとうことで、普段は国外で勉強しているせいか現在の日本語能力を証明するものがないという被験者もかなりいた。

アンケートは対面で用紙を配布して行った。なお、アンケートでは日本語教育学会の倫理規定に基づき、個人情報に配慮して行い、それをデータ化した。

ある対象物に対して、カタカナ語と非カタカナ語が存在する場合、どのような使い分けが理解しやすく、どのような使い分けが理解しにくいのかを探る手がかりとして、学習者のレベルに注目した。初級の学習者でも使い分けが理解できているものと、上級にならないと使い分けが理解できない、あるいは上級でも使い分けが難しいものを知ることによって、理解がしやすいものと理解しにくいものを分類できるだろうと予測するからである。そこから、理解がしやすい単語はどのような特徴をもっており、逆に理解が難しい単語はどのような特徴があるのかを考察する。

初級の被験者は 12 名で、日本語学習歴の平均は約 2.2 年であった。JLPT4 級を持っている者が 1 名いたが、その他に資格を持っている者はいなかった。

中級の被験者は 32 名で、日本語学習歴の平均は約 4.95 年であった。JLPT2 級を持っている者が 2 名いた。その中で日本語学習歴が最も長い者は 10 年で、最も短い者は 1 年であった。

上級の被験者は 9 名で、日本語学習歴の平均は約 4.7 年であった。その中で日本語学習歴が最も長い者は 8.5 年で、最も短い者は 1.5 年であった。上級というのは、あくまで自己申告のレベルであるが、その中で JLPT 1 級を持っている者が 1 名、1 級を 69%でき

たという者が1名が1名であった。つまり、9名中、5名は何らかの根拠があり、自分自身を上級であると判断している。

今回はレベルによる使い分けの違いを見るため、初級と上級の学習者の使い分けに絞って、分析していく。

表4: 上級の被験者の詳しい属性

NO.	性別	年齢	母語とその他の使用言語	学習歴	日本語のテスト
NO.1	女	16	英語・韓国語	3年	AP Japanese
NO.2	男	27	英語	8.5年	JLPT N1 69%
NO.3	女	22	英語	6年	
NO.4	女	20	英語・日本語	3年	JLPT N1
NO.5	女	21	英語・中国語	1.5	OPI advanced Level
NO.6	女	22	英語	6年	
NO.7	男	22	英語	3年	
NO.8	女	20	英語	6年	OPI advanced Level
NO.9	男	23	英語	6年	

4. カタカナ語と非カタカナ語の使い分けと日本語レベルの関係

英語を母語とする日本語学習者のカタカナ語と非カタカナ語の使い分けに、日本語のレベル（初級か上級か）がどのように影響しているかを分析した。手順として、初級と上級のレベルに分けた回答の傾向をレーダーチャートで表し、その傾向を比較・分析たした結果、大きく以下の３つのタイプに分類されることがわかった。

詳しい分析は後で述べることにして、まず、３つのタイプを解説する。

タイプIは初級であっても上級であっても回答に差が無いタイプである。かつ、回答が1つのベクトルに集約されており、日本人と同じような回答パターンを示すものである。つまり、早い時点にそのカタカナ語の使い分けが理解されていると考えられるものである。

タイプIIは初級と上級の回答が大きく異なるタイプである。初級は混乱しているが、上級になると回答に一定の傾向があり、日本語学習の習得が進むにつれ、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けの規則を理解していたったと考えられるものである。

タイプIIIは初級でも上級でも回答が混乱しており、一定の傾向がないものである。初級はもちろんであるが、上級であっても、使い分けの規則性が捉えにくく、回答に確信がないものである。

＜タイプI：理解しやすいタイプ＞

＝カタカナ語と非カタカナ語の指示対象が別になっており、カタカナ語が有標なもの

カテゴリー3 Glove グローブと手袋

カテゴリー4 Potato ポテトと芋

＜タイプ III：使い分けの基準がわかれば理解しやすいタイプ＞
＝材質や形態、使用方法などで使い分けがされているもの
　カテゴリー 1　Bottle　ボトルと瓶
　カテゴリー 2　Brush　ブラシと筆
＜タイプ III：理解しにくいタイプ＞
＝一見、非常に意味がよく似ていて使い分けの基準を規則化しにくいもの
　カテゴリー 5　Tea　　ティーとお茶
　カテゴリー 6　Ticket　チケットと券

4.1　タイプ I：習得しやすいタイプ

＜タイプ I：理解しやすいタイプ＞
＝カタカナ語と非カタカナ語の指示対象が別になっており、カタカナ語が有標なもの
　カテゴリー 3　Glove　グローブと手袋
　カテゴリー 4　Potato　ポテトと芋

まず、最初に揚げられるのが、カタカナ語と非カタカナ語が相補分布的な関係にあり、カタカナ語で指すものと、非カタカナ語で指すものの指示対象が異なるものである。

まず、レーダーチャートの見方を解説する。４つの角が以下のそれぞれの回答に対応している。

1　Never　　（まったく＊＊を使わない）
2　Sometimes　(どちらかというと＊＊を使わない)
3　Often　　（どちらかと言うと＊＊を使う）
4　Always　　（常に＊＊を使う）

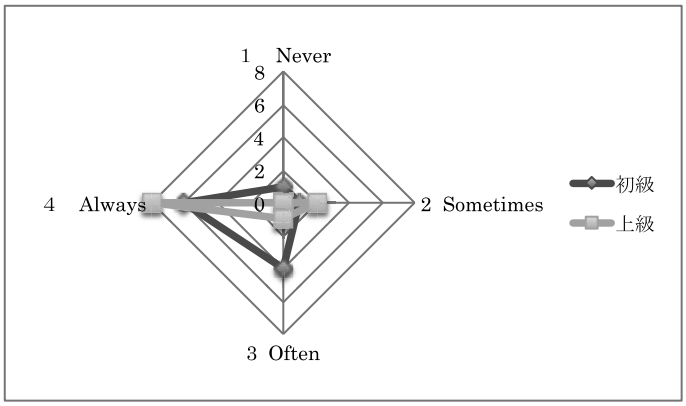
つまり、１や２が多ければ「使わない」と判断が強く、3 や４が多ければ「使う」という判断が強いことになる。初級の被験者は 12 人で、上級の被験者が 9 人であるため、母数が異なる。母数が異なるが、レーダーチャートで同じような図形になれば、同じような回答の傾向があることがわかる。

回答にばらつきがあればあるほど、レーダーチャートの中の四角の空間が大きくなり、回答にばらつきがなく、１つの回答に集約されると、四角の空間がなくなり、フラットな 1 本の線のような形になる。

野球の道具に「グローブ」を使うかという質問の答えをみると、上級はほぼ 1 本線になっており、回答４「使う」を選好している。初級も回答３「まあまあ使う」と回答４「使う」を選好しており、上級と同じような傾向を示しているといえるだろう。

日本語では「グローブ」というと、野球やボクシングなどのスポーツの時に使う特別な道具であって、普通の手袋のことは決してグローブとは言わない。このように、日本語ではグローブと手袋は指示対象がはっきりと異なっている。一方で、英語の glove は手袋の総称であり、普通の手袋に glove を使うが、手にはめるものすべてを指す上位概念の語であるため、野球の道具の場合、単に glove と言っただけでは、言葉足らずになる。きちんと言うには「baseball glove」あるいは、「mitt」と言わなければならない。それに

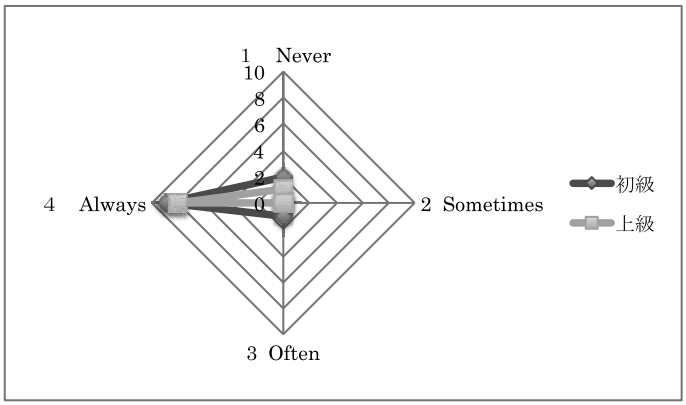
表 5: 野球の道具に「グローブ」を使うかという質問の答え



も関わらず、上級レベルの被験者のほとんどが、野球の道具に「グローブ」を使うと回答しており、回答にぶれがない。興味深いのが、初級の被験者もカタカナ語のグローブが野球の道具のみを指すことを理解しており、初級と上級の学習者の回答がほぼ同じ傾向となっていることである。

また、カタカナ語である「フライドポテト」の中には「ポテト」が入っているが、英語では一般的に「French fry」あるいは「Frites」と言われ、「potato」がその名称に入らないことが知られている。そのことを裏付けるように、英語 potato の調査では「フライドポテト」に関して potato を使わない（回答 1 と回答 2）という回答者が合計 40%（22 人）いた。それにも関わらず、日本語ではその対象物に「ポテト」を使うという回答者が多いことを＜表 6 ＞は示している。

表 6: 細切りにした揚げた芋に「ポテト」を使うかという質問の答え



つまり、英語ではその対象物に対して、potato と言わないが、日本では細切りにした油であげた芋が「ポテト」と呼ばれていることを認識しているのである。日本人に対して

行ったアンケートでもポテトを選択する割合が非常に高かったが、それと同じような傾向が日本語学習者にも見られる。アンケートは日本で行ったため、被験者は日本に来ている日本語学習者である。日本の生活の中で、フライドポテトの実物をファーストフード店などでよく見るせいなのか、これもかなりはっきりとした傾向が見られた。

もし、日常生活での接触率が単語の使い分けに影響を与えているならば、日本に一度も来たことがない日本語学習者に行ったら、英語の potato と同じような、ポテトを使わないという回答者がもっと増える可能性がある。

4.2　タイプ II：使い分けの基準がわかれば習得しやすいタイプ

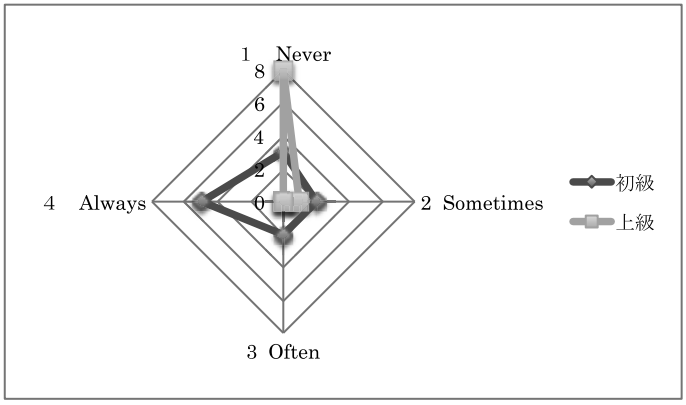
＜タイプ III：使い分けの基準がわかれば理解しやすいタイプ＞
＝材質や形態、使用方法などで使い分けがされているもの

カテゴリー 1　Bottle　ボトルと瓶
カテゴリー 2　Brush　ブラシと筆

タイプ II は初級と上級の回答が大きく異なるタイプである。議論の都合上、カテゴリー２の「ブラシ」と「筆」の使い分けから見ていくことにする。習字の筆を見て、ブラシというかという質問に対し、初級の学習者は回答にばらつきがありながらも、「使う」を選んだ回答が多い。それは、英語で筆のことを「brush」呼ぶため、よくわからない対象物を判断するときは、母語の知識を利用するからだと考えられる。

一方で、上級ではほとんどの人が「使わない」を選んでいる。このことから、上級の被験者達はこれまでの経験から、習字の筆には「ブラシ」ではない、非カタカナ語を使用することを認識していることがわかる。

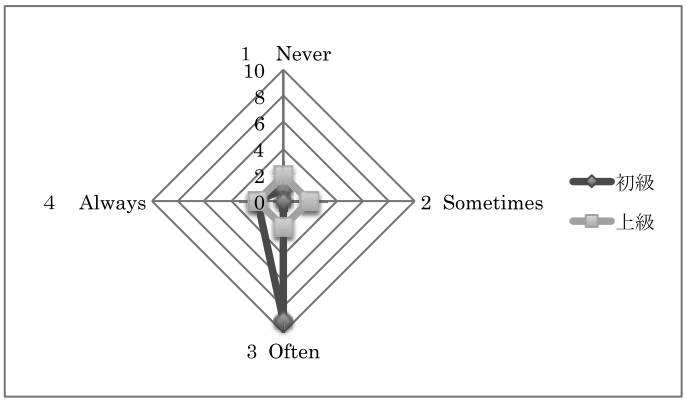
表 7: 習字の筆に「ブラシ」を使うかという質問の答え



それでは、「筆」と「ブラシ」の使い分けは、どのように認識しているのだろうか。可能性としては２つある。１つ目として、日本的なものは「筆」、そのほかのものは「ブラシ」という使い分けのルールを適用している可能性である。２つ目として、毛先を下向きにしてそこに水気を含また状態で、文字を書いたり、絵を描いたりするものを筆とい

い、毛先を上向きして、比較的水気が少ない状態で使用するものをブラシとしている可能性である。

表 8: 絵筆に「ブラシ」を使うかという質問の答え



＜表 8 ＞からわかるように、絵筆に関しては、上級者の回答がレーダーチャートでほぼ完全な四角になった。無回答が 1 名いるために、N=8 になり各回答が 2 名ずつで、すべての回答に分散したからである。これはつまり、絵筆に「ブラシ」を使ってもいいのか、使ってはいけないのかわからない状態であることを示している。久津木・池谷（2013）で、日本人母語話者では 100%が「筆」を選んでおり、「ブラシ」を選んだ回答者は 0%であったことを考えると、英語を母語とする日本語学習者は 1 つ目の可能性である日本的なものは「筆」、そのほかのものは「ブラシ」という使い分けのルールを適用していることがわかる。

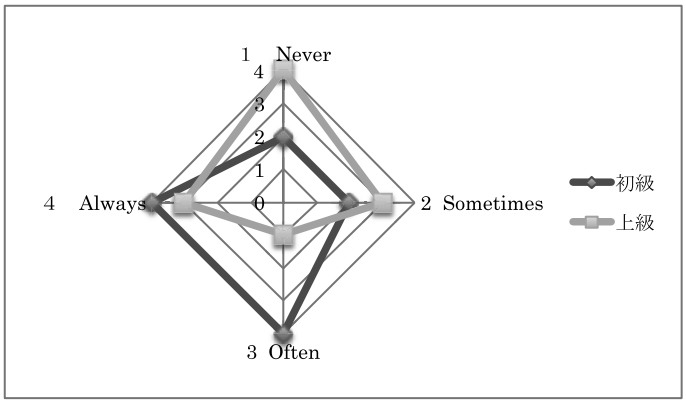
一方で日本語母語話者は 2 つ目の可能性である、毛先を下向きにしてそこに水気を含また状態で、文字を書いたり、絵を描いたりするものを「筆」といい、毛先を上向きして、比較的水気が少ない状態で使用するものを「ブラシ」とする使い分けのルールを適用していた。

日本人母語話者とは多少異なりながらも、日本語学習者がそれまでの経験や知識を活かして、語彙に関しても、一種中間言語的な独自のルールを編み出し、判断していることがこれらの結果からわかる。

それでは、次に「ボトル」と「瓶」の使い分けについて見ていく。

初級の学習者はワインの容器に対して「ボトル」を「使う」を選択した回答者が多いのに対し、上級の学習者は「使わない」を選択した回答者が多い。これだけ見ると、初級の学習者の方が正しく選んでいるように感じられるが、瓶は主にガラス・陶器などでできた容器のことを指す。それに対して、ボトルはプラスチックでできた容器を指すことが多い。そのため、一般的には、ビール瓶、花瓶、空き瓶のように、素材と「瓶」の使い分けが対応している。ただし、その「瓶」の中に、ワインボトルのように、慣習的に「ボトル」を使う物が混じっている。それが、洋酒の瓶のグループである。これらは、

表 9: ワインボトルに「ボトル」を使うかという質問の答え



「＊ワイン瓶」のように語彙化はしておらず、「ワインの瓶」のように合成的な形でしか言うことができない。しかし、飲み終わったワインボトルは「空き瓶」となり、瓶になる。これらを「ボトル」と呼ぶのは慣習的に決まっているものであり、ガラス製のものは瓶という原則からは外れている。

＜表 9 ＞を見ると、上級の学習者はワインの容器には「ボトル」を「Never(使わない)」を選んだ回答者が多い。これは、ガラス製のものは瓶という規則を知っており、それを一般化したせいだと考えられる。それに対して、初級の学習者は「瓶」という単語に対して明確なイメージがないため、英語の bottle と同じように「使う」を選択した回答者が多くなっている。

これからわかることは、日本語の学習が進むにつれて、学習者が語彙の選択に対して独自のルールを設定し、カタカナ語と非カタカナ語の使い分けを判断していることがわかる。

これらの脳内の語彙の意味カテゴリーは、最初は英語の意味に影響を受けているが、日本語におけるその対象物に対するインプットが増えるとともに語彙の認知カテゴリーが修正され、日本人と同じような意味のマッピングになることが予測される。

4.3　タイプ III: 理解しにくいカタカナ語

＜タイプ III：理解しにくいタイプ＞
＝一見、非常に意味がよく似ていて使い分けの基準を規則化しにくいもの

カテゴリー 5　Tea　　ティーとお茶
カテゴリー 6　Ticket　チケットと券

最後に考察するタイプ III は初級でも上級でも回答が混乱しており、一定の傾向がないものである。初級はもちろんであるが、上級であっても、回答に確信がない。

タイプ III とタイプ I は初級の学習者と上級の学習者とは同じようなレーダーチャートになるという点では共通点がある。しかし、タイプ I の日本語学習者達はある程度の確

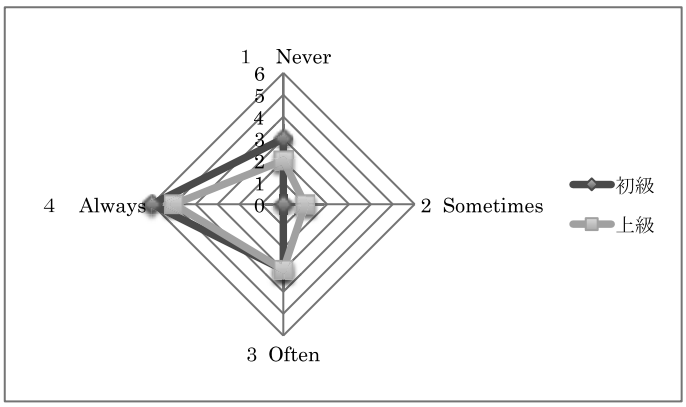
信をもって、回答を選んでいるので、回答のばらつきがない。また、日本人の回答とも一致し、1 本の線のようなフラットな閉じたレーダーチャートとなる。

それに対して、タイプ III はどういう基準でカタカナ語を選んだらよいのかはっきりしないため、上級であっても、回答がそろわず、かつ、どちらのレベルも母語である英語の知識を利用するため、結果として初級と上級の学習者が同じようなレーダーチャートとなる。

飛行機に乗るものに「チケット」を使うかとう答えに対して、日本語学習者は初級であっても、上級であっても「使う」を選んだ回答者が多い。これは英語では「airline ticket」と呼ばれたり、「boarding pass」と呼ばれるものである。

日本語では「航空券」「搭乗券」と呼ばれるものであるが、「券」は「チケット」を排除するわけではなく、「飛行機のチケット」ともいうことができるものである。つまり、「チケット」と「券」が共存しており、どちらか 1 つしか言えないような排他的な関係になっていない。このように、日本語の語彙として使い分けのルールが確定していないため、基準がとりにくいものである。そのため、日本語学習者は英語の知識を利用して回答していることがわかる。

表 10: 飛行機に乗るものに「チケット」を使うかという質問の答え



それでは、日本人母語話者はどう判断しているだろうか。久津木・池谷（2013）では、日本人に対する予備調査の中で、自由記述の中では「チケット」と使っても良いという記述が見られたが、実際に写真を見て選んでもらう質問ではコンサートのチケットのみが「チケット」の使用に優位な差が見られ、その他のものは有意には許容されないという結果が出た。つまり、「チケット」は使えないわけではないが、無意識の選択として、「券」が好まれることがわかる。

更に複雑なのが、「茶」と「ティー」の使い分けである。久津木・池谷 (2013) の調査では日本語母語話者の結果では「茶⇒紅茶⇒様々なタイプのお茶（=ティー）」という紅茶の中での意味のヒエラルキーが指摘されている。また、英語の tea についての 5-1 から 5-5 の写真刺激は、常に tea が「使える」を選択した人が多く、英語においてすべての対

象物が一般的に tea と呼ばれるカテゴリーに入るものである。

冷たい紅茶を何と呼ぶのかとう質問に対しては、初級、上級の学習者ともに「ティー」を「使う」を選択した回答者が多いが、タイプ I のように、レーダーチャートが 1 本線になるような強い傾向を示していない。冷たい紅茶は日本語では「アイスティー」と呼ばれ、その名称に「ティー」が入っているのにも関わらず、確信をもってティーを選んだ回答者が意外に少ない。

その理由として、「ティー」の持つ独自性がある。日本人母語話者では、温かい紅茶に関しては、非カタカナ語の「お茶」を選好する傾向があった。それに対して、同じ紅茶でもそれを冷たくしたものはカタカナ語である「ティー」を選好する傾向がある。つまり、何をティーというのかは、その対象物ごとに決まっており、そこには明確な規則が見いだしにくい。なぜ、このような振る舞いをするのかを考えてみると、ティーは 1900 年代から日本に早くから外来語として輸入されたことが知られている。

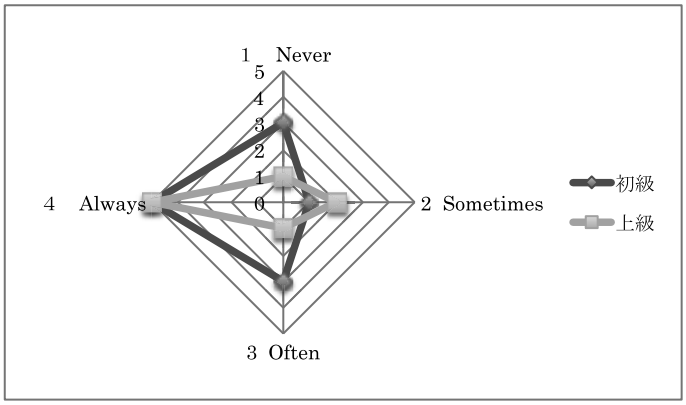
① 茶。特に紅茶をいう「レモンティー」
　＊風俗画報一二九号（1901）食堂「ライス（飯）と呼びチー（茶）を叫べば、盆を携ふる給仕人も却々忙しかりき」
② イギリスの習慣で、午後に取る軽食。アフタヌーンティー。

（精選版　日本国語大辞典 2006）（下線は筆者）

このように、「ティー」は日本語として定着しており、「green tea」といえば、英語の原義から言えば緑茶のことであるが、日本語ではそこから外れて、抹茶に甘い味をつけ冷やして飲むものに、「グリーンティー」と呼ぶなど、語としての生産性を獲得している。

こうなると、単に洋風なお茶に「ティー」を使うというルールでは処理できなくなり、結果として、ティーは聞いたら理解できるが、使い分けに関しては判断が難しくなる。

表 11: 冷たい紅茶に「ティー」を使うかという質問の答え



5. まとめ

これまでの議論をまとめると、同じカタカナ語と非カタカナ語であっても、その使い分けが理解しやすいものと、理解しにくいものがあることがわかった。タイプ I の「ポテトと芋」「グローブと手袋」のように、カタカナ語が有標で指し示す対象物が全く別物であるとき、最も理解が簡単であることが証明された。

次に タイプ II の「ボトルと瓶」「ブラシと筆」のように、材質や形態、使用方法などによって、例外がありながらも一定の使い分けがあるものがある。これらは日本語の学習や語彙のインプットが進むにつれ、意味カテゴリーが修正されていく。

最期に、最も理解しにくいと予測されるのが、タイプ III の「チケットと券」「ティーとお茶」のように、一見、非常に意味がよく似ていて、使い分けの基準を規則化しにくいものである。非カタカナ語とカタカナ語の語彙カテゴリーの境界が融合しているため、同じものを「飛行機のチケット」や「飛行機の搭乗券」のように言い表すことができ、それらの語彙は排他的ではなく共存している。それらは慣習法的に対象物ごとに言い方が決まっているため、完璧に使い分けることは難しいが、逆にカタカナ語が日本語として語彙化しているため、「電車の回数チケット（回数券？）」や「そばティー（そば茶？）」と言っても、コミュニケーション上の大きな弊害を引き起こさないのである。

日本人であっても揺れているこれらの使い分けを理解することは、日本語学習者にとってもは最も難しいことが予測される。

参考文献

秋元美晴（2002）『よくわかる語彙 (日本語教師・分野別マスターシリーズ)』アルク,64.

池谷知子・久津木文（2013）「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究-Tea とティーとお茶は同じなのか」『TALKS』16,21-36. 神戸松蔭女子学院大学学術研究会.

池谷知子・久津木文 (2014) 「英語を母語話者とする日本語学習者におけるカタカナ語の研究-習得しやすいカタカナ語と習得しにくいカタカナ語」『TALKS』17,28-45. 神戸松蔭女子学院大学.

久津木文・池谷知子 (2013)「日本語母語話者のカタカナ使用についての予備研究」『TALKS』16,37-50. 神戸松蔭女子学院大学学術研究会.

佐藤弘（1994）『外来語と英語のズレ-英語を学び、使う人のために-』八潮出版社.

陣内 正敬 (1993)「『さじ』と『スプーン』:外来語化と命名のゆれ」『言語文化論究』4号,47-54. 九州大学言語文化部.

陣内 正敬 (2008)「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』11号,47-60 関西学院大学.

鳥飼玖美子（2007）「カタカナ語に見る意味のずれ」『月刊言語』2007 年 6 月号,52-59.

中山恵理子・桐生りか・山口昌也（2008）「日本語教育における『カタカナ教育』の扱われ方」『日本語教育』138 号,83-91. 日本語教育学会.

Author's web site: `http://www.shoin.ac.jp/`

（受付日: 2015.1.10）